

京都大学	博士(文学)	氏名	津 守 陽
論文題目	沈従文における〈郷土〉の表象 — 近代文学による「原＝中国」像の構築		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文が扱うのは、近代中国における〈郷土(シャントウ)〉という概念と、それをめぐる文学上の想像である。1920年代、魯迅や周作人、茅盾など文学研究会のメンバーを中心に、農村部を題材として描く小説創作が行われ、地方色を打ち出した文学が提唱された。その影響下に地方出身の若手作家たちが農村を題材とする小説群を創作し、以後農村・地方・田舎を舞台とした文学作品は、時代の変化や作家の個性に応じてスタイルを替えながら、現代に至るまで脈々と生産され続けることになる。これらの文学は、のちに「故郷／農村／地方／田舎」を総称する〈郷土〉という言葉を用いて、〈郷土文学〉とカテゴライズされる。</p> <p>近代以降に人々が都市へ流入しはじめるのをきっかけに、故郷・農村・地方といった郷土的世界が文学的題材として再発見され、創作と読書行為を通じて生産・消費されるという現象は、中国のみならず日本を含む世界においても共通している。しかし郷土文学という区切りが一つの文学カテゴリーとして定着するほど作品が大量に生産され、現在に至るまで文学や映画などの場で再生産され続けているのは、中国に特殊な現象と言える。また中国に顕著な現象として、文学を中心とした〈郷土〉をめぐる言説によって、〈郷土〉に「(ウェスタン・インパクト以前の中国に) かつては存在した中国本来の姿」という「原＝中国」のイメージが重ね合わされていることが挙げられる。こうした現象の背後には中国の近代国民国家の形成過程との強いつながりが指摘されている(プラセンジット・ドゥアラ 2000)。〈郷土〉をめぐる思潮は、近代中国がどのような「想像」を経て「共同体」として形成されてきたのか、そしてこの想像が現代にどのような影響力を持っているのかについて考える上で、重要な脈絡のひとつと考えられる。</p> <p>序章は、〈郷土〉にまつわる上記の状況と、定義が確定されないまま漠然と広範囲で用いられている〈郷土〉の恣意的使用状況を問題系としてとらえた上で、近代中国文学上の〈郷土〉表象を具体的に考察した。そして一人の作家が故郷の辺境地方を作品化する試行錯誤の中に、文学上〈郷土〉が立ち上がってくる、その構築過程を描き出した。研究にあたって対象としたのは、現在でも中国語圏の知識層から高い人気を誇る作家沈従文(1902～88)である。沈従文は「郷土に対する想像の広がりから言っても、視野の豊富さから言っても、中国近代文学における『郷土文学』の最も重要な代表人物」(王徳威、2007)と称される。彼はいわゆる1920年代に興った郷土文学の主流作家ではない。1920年代の郷土文学作家たちは困窮にあえぐ農民の姿や知識人の帰</p>			

郷物語を多く描いたが、彼らの作品は現在ほとんど読まれなくなっている。これに対して沈従文は、漢民族と少数民族が混住する湖南の辺境地帯（湘西地区）を舞台に、軍閥の兵士出身という珍しい出自を生かして多彩な辺境の生活を描くことで、1930年代の文壇に独自の存在感を示した。少数民族の血を引き、「田舎者」を強く自認するアイデンティティを持ち続けていたことなど、彼は郷土文学作家群とは異なるスタンスを多く有する。代表的存在でありながら異端でもある沈従文という作家は、近代中国文学における〈郷土〉意識の生成を考える上で非常におもしろいケースとなる。立場の独自性に違わず、沈従文の文学に現れた〈郷土〉の表象の諸相を探っていけば、彼の〈郷土〉像が悠久不変の牧歌的な印象とは異なり、非常に複雑な構造を有していることが見えてくる。

第1章「郷土の生成 — 郷土文学をめぐる民国期の議論」では、沈従文文学における郷土の表象を分析するうえで必要と考えられる作家の生い立ちなどの基本情報を確認し、郷土と郷土文学をめぐる先行研究を整理する。ことに沈従文の故郷である湘西については、多くの作家が題材とした紹興などの江南地域とは大きく異なる地政と歴史を持ち、予断を入れない丁寧な理解が必要である。そのうえで民国期に郷土文学の興隆を生みだした原因を、都市における地方出身作家の割合や交流といった社会的背景、および「地方色文学」・「農村文学」をめぐる民国期の議論から掘り起こす。当時の言説から見えてくるのは、郷土文学が当初から明確な認識をもって提唱されたのではなく、周作人や茅盾らによって地方や農村が等しく国民文学の糧になることを期待されるなかで、じわじわと「郷土」の認識が醸成されてきたということである。

郷土文学の主流が郷土の暗黒面を暴いたのとは対照的に、沈従文は故郷の湘西を牧歌的に描いたとされてきた。しかし彼の創出した湘西像は遙かに複雑である。第2章「「美しき郷土」の誕生 — 黒と白の少女形象から」では、沈従文描く少女形象の変遷を追うことで、作家が湘西を描く筆調の変化を浮き彫りにし、沈従文における郷土像が変遷を経て構成されてきたものであることを明らかにする。分析によれば、湘西作品には開放的性愛を象徴する日焼けしたセクシーな女性と、神話的な美貌の色白女性の二系統が存在する。当初は峻別されていた両系統の女性像は徐々に融合し、浄化を経て代表作「辺城」（1936）の純粹で素朴な美少女像に結実する。類型的な沈従文の女性形象は郷土を体現する記号としての役割を果たしていることから、少女像の変遷は沈従文の郷土観の変遷を意味すると考えられる。すなわち本論文が発見したのは、素朴で純粹な郷土世界が文学上に誕生していく過程のひとつなのである。

第2章では、沈従文の女性像が「純粹で素朴な郷土」というイメージを強化する記号的な役割を果たしていることを指摘した。第3章「郷土を逸脱する田舎者たち — 女性形象と内面の空白」ではこの成果を発展させ、沈従文作品の女性像について、内面に関する描写の欠如を分析することで、沈従文の郷土が重層的であることを論じた。「三人の男と一人の女」（1930）はヒロインの突然の自殺や、それを慕う若者による死体愛

好の暗示などの異様な内容によって注目される短編である。この物語中で重要な役割を果たすヒロインを仔細に分析すると、彼女の内面に関する描写が極めて少ないことに気付く。描写の欠如により、ヒロインの自殺理由や、彼女を慕う三人の男に対するヒロインの感情は、類推不可能な「空白」となっている。女性の内面描写の欠如は、「辺城」「龍朱」などの湘西作品に共通する。これらの作品はヒロインに関わる男性主人公に破滅が訪れる点で共通することから、ヒロインの内面における「空白」には、無自覚のうちに誘惑と破滅をもたらす「不可知」な力が隠されていることを指摘した。前章で分析したように、沈從文の女性形象が持つ純粹無垢な外見には、純粹な郷土イメージを強化する役割がある。と同時に、ヒロインたちの内面に隠された破滅的な力は純粹な郷土という公認イメージをあやうくし、彼女らを郷土から逸脱させていく。強化と逸脱という二つの拮抗する力が、相互に境界を侵しながら同時に存在する場として、沈從文の重層的な郷土は存在するのである。

第2・3章では、女性形象の外見的特徴の変遷や内面描写の空白など、物語世界の内容面から考察を進めてきた。第4章「田舎者の内面に迫る語り — 「辺城」における人物呼称」では、人物呼称の使用特徴という表現スタイルに焦点を移し、テキストに郷土らしさを与える語りについて考察することを試みた。沈從文はしばしば「文体作家」と称されたというが、この評語の内実について、既往研究では十分な説明が与えられてこなかった。彼の文体のどこに特徴があるのか、それを具体的に考える試みの一つとして、本章は代表作「辺城」の語りの特徴について考える。気づかれにくいことだが、「辺城」ではヒロイン翠翠の名が非常に頻繁に文中に現れる。そして翠翠が常に「翠翠」という固有名で指示されるのに対して、同じく主要人物である翠翠の祖父は「渡し守」「老船夫」など様々な呼び名で指示されることに着目し、「辺城」における人物呼称の特徴と意義を考察した。まずは近代中国の小説における人物呼称の役割について、命名と文中人物指示の二つのレベルに分けて探り、親族呼称や姓・排行を含む呼称がしばしば社会性を増すツールとして用いられたことを指摘した。しかし沈從文の呼称使用の特徴は主に第二のレベルにある。「辺城」では、翠翠だけは変わらぬ固有名で指示され、翠翠以外の人物に対する呼称は、焦点人物の切り替えに従って常に揺れ動き続ける。ここには翠翠にぴたりと寄り添い、彼女の心理を呼称の遠近によって再現する語り手が見える。また翠翠を三人称代名詞の「彼女」で指示した箇所からは、「彼女」を用いることではじめて翠翠の思索に潜っていくという語りの性質を見ることができる。注目すべきは、語り手は内面に潜行しうる「彼女」の語りを決して多用せず、むしろ彼女の内面が「わからない」ものであることを再三強調している点である。ここからは、ヒロインが代表する「田舎の人間」を豊かな内面世界を持つ存在として想定しておきながら、その内面は最終的には誰にも「わからない」ものであると考える作家の姿が見える。人間の内面を描くという近代文学の重要な課題に対し、まるで文学史に逆行するかのような沈從文の姿勢は、彼の湘西作品を非常に特異な位

置に置いている。

沈従文が作品中で繰り返し描いた湘西の形象は、しばしば悠久不変の静かな郷村としてとらえられる。1934年の『湘行散記』における万古不変の慨嘆を見れば、この作家が確かに湘西の暮らしを不変の静かな営みと見なしていたことが窺える。

しかし沈従文の描く郷村は一貫して「都市＝千変万化」「郷村＝悠久不変」という二項対立の中にあっただけではない。沈従文の湘西作品から時間に関わる表現を追っていけば、ここにも変遷がある。第5章「悠久不変の郷村像 ― 郷土をめぐる時間形式」では、「括復法」(ジュネット)、および時刻の挿入・天候描写といった表現に焦点をあてて分析し、沈従文の時間表現が、同時代の郷土文学と共通するところを持ちながらも独自の発展を遂げたことを示した。まず都市を描いた1925年の「公廨にて」「絶食以後」では、毎日リズムを刻む都市の時間が日記や記念日によって表現され、主人公の疎外感が強く示される。他方湘西を描いた「市場」では、「いつもの」という括復の語りによって、止まった「常態」の世界が描き出される。この時期の湘西作品は「夢」「追憶」という枠組みを持つ点で他作家の郷土文学と共通するが、追憶の基準となる現在へ回帰しない点において異質である。湘西を描く筆が成熟した1930年を見てみると、辺境にも日付の進行する時間が訪れたことがわかる。「山道にて」の時間表現や「貴州小景」の印象深い黄昏描写からは、スケジュール通りに進む時間、そして淡々と進行していたはずの日常に侵入する静かな異常というモチーフが読み取れる。同時代の郷土文学が天候描写によって郷村の不変を象徴させるのに対し、沈従文の天候描写は異界への裂け目を誘導し、世界の変容に気づかせる。沈従文の文学において、湘西の時間が生きて動き始めるためにはこうした陰影が不可欠だったことが窺える。1934年頃に至ると、「辺城」や『湘行散記』に湘西が万古不変であるという感慨が現れ、悠久不変の郷村像が確立・定着する。しかし「辺城」における時間は、主人公の心の動きに応じて伸縮するものとしても描かれている。「辺城」の描く湘西は、表面上は人々が二千年前と同じ単調な時間を過ごしていながら、ひとりの人間が伸縮する時間を有している重層的な場であると言える。そして時間を心理に応じて変化する相対的なものととらえる作家の眼差しは、都市作品の「八駿図」にも指摘できる。以上からわかるのは、沈従文の湘西像が、現在と隔絶した絵姿としての郷村から、複雑な限や動きを持つ生きた郷村となり、さらに対象化を経て万古不変の普遍的郷村像へと昇華していったことである。「伸縮する時間」観の登場は、郷村像の抽象化に伴い、作家の描出対象が郷村から人間へと移ってきたことを示唆している。そして本章で見た時間表現からは、沈従文が湘西という対象と格闘する中で、奇妙な独自の表現技巧を獲得していったことが見て取れるのである。

以上の各章で用いたいくつかの視角による分析からは、1925年頃―1930年頃―1934年頃を目安に、最初期の形態―成熟と多様化・洗練と普遍化という段階を辿る沈従文の湘西認識が見える。終章「「原＝中国」への接近―〈故郷〉から〈郷下〉〈郷村〉へ」

では、本論文の描き出したこの変遷を裏付ける事象について補足し、郷土として普遍化した湘西が「中国」の内部へと位置づけられていく過程を明らかにする。郷土文学の代表とされる沈從文であるが、実は彼自身はほとんど郷土という言葉を用いていない。彼が主に用いていたのは、故郷・郷里・田舎〈郷下〉〈郷間〉・村〈郷村〉・農村・地方・辺境といった言葉であった。彼がこれらの言葉を使用した状況を見てみると、本論文が様々な表象から抽出してきた郷土像変遷の過程と重なるように、初期段階から成熟へ、そして頂点を経て郷土意識の淡化へという変遷が見られる。初期に見られる「故郷」「帰郷」などの用語からは、魯迅や1920年代郷土文学作家群に通ずる、私的な空間として湘西を認識する沈從文の郷土観念が見える一方で、「郷里」「郷間」など用語が定まらない様子もうかがえる。やがて湘西の対象化が進むにつれ、彼が「田舎者（郷下人）」アイデンティティを高らかに宣言する場面が増え、湘西を指す言葉は〈郷下〉に統一されてくる。この高揚した〈郷土〉認識は、「辺城」の少し後に書かれた「習作選集代序」（1936）を頂点とする。そして後期の散文や評論からは、「郷村」「農村」など、村落社会を客観的にとらえた思い入れの薄い用語に変化している。1930年頃に向かう〈郷土〉認識の盛り上がり軌を一にするのが、中国全体を俯瞰し、それから船や鉄道に乗って湘西に足を踏み入れるような、ロケーションの語りの挿入である。この語りは、創作生涯の当初は「ほぼ化外に同じい湖南の辺境」（「郷間の夏」1925）と、まるでほとんど「中国」の外にあった湘西を、他ならぬ中国の中の一地方として位置づける。同じ時間・同じ空間の中で異なる事件が関連性をもって進行しているという想像が共同体を作り上げた、というアンダーソンの指摘を考えると、1930年以後に顕著となる沈從文のロケーションの語りには、〈郷土〉がまさしく「中国」の一部として立ち上がってくる様子が見えてくるのである。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀以来の中国には、〈郷土(シャントウ)文学〉と総称される、地方的色彩を濃厚にたたえた文学創作の有力な流れが存在し、1980年以来、多くの研究者によってそれをめぐる活発な議論がおこなわれてきた。のみならず、21世紀の中国文学の創作においてさえ、〈郷土文学〉はなお見過ごせない重要な存在なのである。

中国語の〈郷土〉に似た概念は、ドイツ・フランス・アメリカなど各国の近代文学にも認められる。しかし、中国の〈郷土〉は、単に農村や地方にとどまらず、ときに首都北京までその中に包みこむことがある。この点について論者は、〈郷土〉を「異なる故郷を持つ個人を国民という集合的他者に関連づけ、各々の地方を国家という全体に統合するきわめて近代的な想像力」に支えられた観念と位置づけたうえで、それがどのような特質を持つものかをとらえるために、ある作家や作品が〈郷土〉意識を言語表現としてうみだした瞬間を、作品自体を通じてとらえようとする。対象として取り上げられたのは、近現代中国を代表する作家であり、郷土文学の最も重要な例となる沈從文(1903-1988)が、故郷湘西——湖南省西部の少数民族地区——を題材として1920年代から30年代に作りあげた小説の言語である。そこから読みとれるのは、当時いまだ国民国家となりえていなかった中国が、どのように自己像を創りあげようとしてきたかである。

従来の沈從文研究は、伝記的事実、作品の中の背景となった思想、題材としてとりあげられている地方文化の要素、伝統と近代の対抗関係などに重点を置くことが多かったように思われる。それらとは異なり、論者の分析は、なによりも作品の中国語表現そのものに密着する。たとえば1928年の「雨上がり」など三作品が描く少女の日焼けと1929年の「龍朱」などに始まる白い肌の描写、そして1932年からの作品群に見られる白と黒の共存を、ひとつひとつことばを拾い上げていねいに吟味することで浮かび上がる、プラトニックな恋愛による浄化された女性形象が現れる過程。あるいは容姿の描写を全く削り落とすことで美を感じさせる少女像の形成。作品中の人物呼称を手段として描き出される「田舎者」の内面。「不変」の時間と日付のある時間とを示す言語表現の選択からみてとれる〈郷土〉観。こうした探求にあたって、各章ごとに分析の角度を変え、できる限り多面的に沈從文の作品の特質を照射しようとした試みは、充分に成功している。

小説の言語表現自体を熟視したこのような研究は、少なくとも沈從文については国内外を問わずこれまであまりおこなわれてこなかった。論者による丹念な分析を通して立ち上がってくるのは、〈郷土〉という概念が作家のなかで「原=中国」像としてどのように構築されてきたか、そのために作家はどのような語彙や表現を選び取ったかの過程である。近現代中国文学研究のために新しいひとつの方向性を切り開いたと言ってもよいであろう。具体例のひとつひとつの手触りを確かめる論者の態度に、中国語およびその文学作品に対する鋭い語感がうかがわれることも、見逃せない点である。

本論文の各章は、その多くがかつて学術雑誌に掲載されたものであるが、博士論文とするにあたり、その後の知見にもとづく改訂を加えるとともに、よく練りあげられた達意の文での確にまとめられており、論者自身のすぐれた表現力を示すものとなっている。さらに、最新の研究に至るまで、沈従文および〈郷土〉のみならず、さまざまな関連する主題についての研究文献をていねいに追跡収集し、その成果をよく咀嚼したうえで書かれていることも、特筆にあたいしよう。

ただ、中国における〈郷土〉の特質を論じた序章、「原＝中国」像の形成を論じた終章が、多くの興味深い見通しを示しながら、いずれもなお考察半ばにあると感じられるのは惜しい。論者はさらなる展開を構想しているだけに、この重い問題にひきつづき挑むよう期待する。また、本論文が〈郷土〉像の創出を論じるにあたってとりあげたのは、主として少女、田舎者、地域社会などの形象に限られる。よく論じられていることであるが、沈従文は地方軍閥のもとで職業軍人としてはたらいの経歴があり、軍隊と地域を題材とした作品群を残した。これら軍隊小説に出てくる〈郷土〉は、本論文でとりあげられているような美しく健康な存在に限定されず、きわめてグロテスクな姿を見せることがある。こうした異質な〈郷土〉像が興味深いものであることについても論者は気づいており、今後の研究によって明らかにされることが望まれる。もちろん、以上のような点は、本論文の博士論文としての価値を決して損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。